11月23日は 新嘗祭（にいなめさい）

天皇陛下により受け継がれる祭祀

例年11月23日。現在の日本では「勤労感謝の日」です。昭和23年に制定された国民の祝日ですが、元来、11月23日といえば「新嘗祭」の日です。古くから、天皇陛下がその年の収穫に感謝して神饌を捧げ、神様と共にお召しあがりになるお祭りの日であり、明治以降からは国の祭日に定められていました。

新嘗祭としての起源は、日本のはじまりの神話にさかのぼります。天照大御神は孫である瓊瓊杵尊（にじぎのみこと）に三種の神器とともに稲穂を授けました。国をつくり民が生きるための糧とすべく天照大御神から手渡された「稲」。有史以来、天皇陛下により、その稲の実りに恵まれた平和で安らかな国にするために祈り、感謝を捧げることを継承されてきました。天皇陛下が行われる宮中祭祀の中でも特に重要とされるのが新嘗祭です。歴代の天皇に受け継がれ、即位されて最初に迎える新嘗祭が「大嘗祭（だいじょうさい）」とされます。

同じく新穀を神様に奉（たてまつ）り、収穫に感謝する神嘗祭と共に、新嘗祭は神宮の五大祭のひとつでもあり、当日は外宮、内宮両宮にて新嘗祭の祭典が行われます。

川曳

陸曳

創始の思いをふりかえり、令和の初穂曳へ

初穂曳（はつほびき） 五十年

令和3年、初穂曳は第50回を迎えました。

神宮の神嘗祭を奉祝する行事であり神宮式年遷宮に伴う伊勢の民俗行事「お木曳行事」、「お白石持行事」の様式を次世代に伝えることを大きな目的として昭和47年からはじまり、昭和、平成、令和、と三つの時代を越えて継続されてきました。

昭和の初穂曳

1 昭和57年 外宮領陸曳／高柳商店街から奉曳車を曳き出しお伊勢大祭会場へ
2 昭和60年 外宮領陸曳／おまつり会場を出て伊勢市駅前から外宮へ曳き込む
3 昭和57年 内宮領陸曳
／昭和57年から平成11年までは御所車に初穂を積んでおはらい町を奉曳
4 昭和54年 内宮領川曳／第1回から10回は宇治二軒茶屋奉献団が担当
5 昭和55年 外宮領陸曳／この年のみ体操服の伊勢市スポーツ少年団が奉曳
6 昭和60年 外宮領陸曳／お伊勢大祭会場を賑やかに進む若者参加の奉曳企画

50年の節目を迎えて

残念ながら令和2年、3年と奉曳の実施はできず、初穂奉納という形での行事開催となりました。本来なら50年を盛大にお祝いする特別行事を予定しておりましたが、実施は叶いませんでした。しかし、50年目の節目であることは変わりなく、創始の思いを振り返る機会を得て、来年からの新たな出発のための力を蓄える一年となりました。

昭和、初穂曳のはじまり

現在では伊勢の恒例行事となった初穂曳、「民俗行事」としては短い歴史かもしれません。しかし、初穂曳の背景には、550年以上続く、御遷宮に関わる伊勢の民俗行事の伝統があります。

そのはじまりは昭和の大戦後、人々の生活スタイルが激変した時代。その中で、先人たちの「20年に一度の御遷宮行事だけでは、若い人たちにその意義や民俗行事の伝統を伝えていくことは難しい。お木曳・お白石持に繋がる行事を創り出し、毎年実施して未来へつなげよう」という思いにより「初穂曳」は生まれました。仕様を模して取り入れた、ということではなく、まず「民俗行事の伝承」を目的に立案されたのです。

伊勢神宮奉仕会の成り立ち

初穂曳は伊勢神宮奉仕会を主として、神宮司庁、伊勢市、伊勢商工会議所、その他関係団体からの協力を得て官民協働事業として開催されています。

伊勢神宮奉仕会とは、昭和38年にお木曳・お白石持を伝承するためにできた団体で、伊勢市内各町・団の代表（担当者）が役員となり構成されています。つまり市内全地域の方が対象といえる団体ですから、初穂曳は現在も伊勢市民が参加できるように広く門戸を広げています。

そして第1回初穂曳は昭和47年、伊勢大祭の一部として実施されることになりました。15日の外宮領陸曳は、当初は町の持ち回りで学区ごとが協力して実施。第10回からは、伊勢神宮奉仕会の各団に参加を呼びかけ集まった有志による伊勢神宮奉仕会青年部が陸曳の企画運営を担うようになりました。

16日の内宮領川曳は、初穂舟を新造して、宇治4ヶ町と二軒茶屋奉献団が担当。第11回から川曳は5つの地域が持ち回りで実施しています。

そして50年が経過し、現在では初穂曳は神宮の神嘗祭を祝う新たな「伊勢のお祭り」行事としても認知されています。

●ごせんぐう千三百年の歴史から

御遷宮のはじまり

式年遷宮の制度は、飛鳥時代に遡り、第40代天武天皇の思いを引き継いだ第41代持統天皇の御代よりはじまったとされています。今から約1300年前、持統天皇4年に内宮、同6年に外宮で初めて行われたといわれる御遷宮。この頃から、今に伝わる様式の社殿（お宮）が造られるようになったと考えられています。天皇による国づくりが行われ律令制度が完成されたその時代には、都では仏教が伝来し神仏習合の国づくりが行われていました。法隆寺建立など、すでに耐用年数の長い、高い建築技術がありましたが、日本の祖となる神の鎮座する処には日本古来の白木の社殿を建て、定期的に御遷宮を行い、全てを新たに造ることで永遠にその神威を伝えるという仕組みが考えられたのです。

式年遷宮としては中断した時期もありましたが、千年以上の間繰り返し行われ、平成25年が第62回と数えられています。都から離れたこの伊勢の地に置かれたことが効をなし、神話にさかのぼる日本固有の文化が守られたのかもしれません。